
オカ研の怠惰で愉快的日常

芽衣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オカ研の怠惰で愉快的な日常

【Nコード】

N2374I

【作者名】

芽衣

【あらすじ】

主人公はある日決意する。学園の悪を倒すことを…。学園の悪————それは生徒会に潜んでいた。主人公は学園の悪を倒すために生徒会に潜入する。しかしそこに待ち受けていたのは罠であった…。

※実際の話は変人共（主人公も含む）が集って変なことをする話です。

はじまりの話

どうしてこうなったのだろう。俺は今でも後悔している。後悔しない日は無いほどだ。俺は何故内申点を上げたいなどと思ったのだろう。俺は何故入ろうと思ったのだろう。それを今でも悔やんでいる。もし入らなければきっと右隣にいる楽しみに笑う少女にも左隣で本を読んでいる男にもそして、目の前にいる悪巧みを考えている女にも出会うことは無かったかもしれない。

始まりはあの時。忌々しいあの瞬間。

暴露すると俺はクラスの奴を全員見下していた。馬鹿馬鹿しい話を繰り返す男子共。ファッションだとかテレビだとかそういうことしか頭にない女子共。全て馬鹿らしい。存在するだけ無駄ではないのか。そんなことばかりぼんやり考えていた。当然俺は孤立した。別に悲しくなかった。あんな奴らと付き合うだけ無駄だからな。とか思ってたし。

「なあ：お前クラスに仲の良い奴いるか？」

急に担任の中田先生がそんなことを言い出した。その日は教育相談で俺の番だった。俺はにっこりと笑いながら居ませんと答えた。先生は眉間にシワを寄せるとしばらくしてなにかひらめいたらしく俺の方に身を乗り出してきた。

「お前生徒会に入ってみないか？」

先生いわく生徒会には優秀な生徒が集まるらしい。なら俺にも合うのではないかと思ったのだろう。

「先生。俺の考えはきつと誰にも理解されませんよ。それに友達なんて作る気がないので」

あっさり断ったのだが先生はあきらめなかった。

「いや！ 大丈夫だ。お前は絶対上手く溶け込めるって」
「どうやら先生は俺を生徒会に入れたくて仕方無いようだ。」

「それに内申点があがるぞ」
その一言にかなり俺の決意は揺るがされた。

「そうだなー。お前が入ったら先生もしかしたらうっかりテストで
でるとこ教えちゃうかもなー」

……………大人ってずるい。

「入りますよ」

そういった途端先生はすごい喜んだ。

「よっし。男に二言はねえぞ！」

先生。俺女になってもいいので取り消させてください。

しかしあの時はそんなこと露ほども思っていなかったのである。

教育相談が終わった後廊下ですれ違った男子共の話が聞こえた。

「俺生徒会入ろうかなあ？」

「ははっ、止めとけ止めとけ。お前馬鹿だし無理だろ」
ここまでは良かった。

「それに生徒会って言ったら変人の集いだろ？」

「頭はいいらしいけどなー」

…。

「それに会長こわいしなー」

……。

その時誰かが男子共に飛び膝蹴りをいれた。

女子だ。黒く長い髪を一つに束ねている。気の強そうな顔をして
いるがなかなか可愛い。しかしどこかで見たことあるような。

「悪い。こけたら当たってしまった。悪気があったわけではないの
だ」

とりあえず全とおかしい。ぜんぜん悪びれてないし、こけて飛び

膝蹴りなどできるわけではない。

普通に考えたらこの人が会長なのだろうけどこの人の下で働くのはいやなので一ミリの希望をかけてみよう。

「…………あの…誰？」

男の勇気ある一人が尋ねる。どうやら会長ではないそうだ。神よ今だけは貴方を信じれそうです。

しかし、女はその男の顔面に遠慮なく蹴りをいれた。

「よく聞け！私はこの学校の副会長だ！」

神とはなんと残酷なんだろう。

副会長VS俺

「うむ…やはり会長と副会長では知名度が全然違うのだな…。ためになったぞ」

手をパンパンとはたきながら副会長は先ほど蹴りを入れた男子共を見下ろしていた。

しばらくしてこちらに気づいたようだ。にらみつけながらこちらに近づいてくる。

：殺されるのか？ その時何故かそう思った。いや、多分殺されるだろう。

—————逃げなくては！

俺はそこから猛ダッシュした。なんか先生が廊下は走っちゃだめですよー。とか言ってた気がするけれどそれどころではない。命には代えられない。

「までええええ！ 何故逃げるのだああああ！」

副会長が追いついてきた。勿論全力で走っている。よく考えてみるとこの副会長は一応女だ。しかし、さっきの蹴りといい今のダッシュといい女にしては————はしたない？ いや、違う。こいつを女と見るのは自殺行為だろう。たぶんそこの男に比べりゃ強い。

とか何とか考えているうちに背中に痛みが走った。そして地面が目の前に。

—————蹴られたのか。

こいつの武器は多分蹴りだ。そのことは分かっていたのに蹴られる可能性を考えていなかった自分がとても馬鹿らしく思えた。

「ふふん。追いついたな」

偉そうに腕組みしながらこちらを見下ろす——いや見下す副会長。

どうやら俺はこれで死ぬらしい。そう思うと何故か今まで見下してきたクラスの奴らが何故かすごい愛しく思えた。何故なのかは一生わからないだろう。

「さて……。私はただ質問をしようと思ったただけなのに逃げるなんてな。罪は重いぞ」

すっごいうれしそうな顔で足を思いっきり後ろへ伸ばす副会長。

そして、正座をして頭を下げている姿勢の俺。いわゆる土下座だ。しかし副会長は止める気は無いようだ。

足が前へ伸びる——。その時！

「やめんか！」

なんと中田先生だ。

「……兄上」

副会長はあっけに取られた顔をして先生を見ていた。

ん？ ……兄上？

とりあえず何に突っ込めばいいのやら。とりあえず兄妹だってことはまあベタな展開としていいだろう。ただ兄上とは幾等なんでも古いだろう。

「すまん。妹が」

中田先生ははにかんだ笑顔でこちらを見る。

たしか中田先生は二十七程度だった気がする。で、俺が十六（高校二年生）で多分副会長は十七または十八（高校三年生）だと思うから……十歳差かよ……。

たしかによく見れば似てるかもしれない。

「兄上。謝ることはない！ もともとこいつが悪いのだ」

そういうと俺に向かって指をさした。……親からしつけられなかったのか？

「こら。人を指差したらだめだろ」
いましつけられているようだ。

「ところで質問って何ですか？」
敬語を使うつもりは無かったのに使ってしまった。よくあることだ。

「私のことを知っているか？」
ちょっと照れた様子でつぶやいた。どうやらさっきの男子共の言葉に結構傷ついているようだ。

一瞬どうするか悩んだ。仕返するなら今だろう。こいつは兄貴の前では比較的大人しいようだ。だからたとえ俺が知らないといっても蹴りをするのはためらわれるだろう。しかし、こいつの性格を俺は完全に理解しているわけではない。もしかしたら蹴られるかもしれない。…ここは安全にいくか。

「…副会長」
そういうと副会長は頭に手をあてた。

「その副がよけいなのだー！」

先ほど自ら副会長と名乗っていたのを俺は忘れていない。

「何故だ！ 何故なのだ！ どうして私はあのエスパーに勝てないのだ？」

エスパー？ それって超能力者のことだよな。

ちょっと頭がこんがらがってきたので適当にまとめる。

・会長Ⅱエスパー（何かの比喩？）

・副会長は会長に勝てない。

・副会長Ⅱ中田妹

・副会長は知名度が低い。

・副会長の武器Ⅱ蹴り

…なんだこのどうでもいい話は…。

「エスパーを倒すためには何が必要だと思うか」
急にそんなことを訊いてきやがった。

「…悪タイプ」

ポケモンを思い出してしまったじゃないか。

「は？」

変な奴を見る目で見てきやがった。畜生。

「まあ、エスパーだとかスーパーだとかは措いておいて…」
中田先生が話しに割り込んできた。

「彼は新しく生徒会に入りたいようだよ」

そういえばそうだった。でも入りたくはない。

副会長は少し驚いたようにこちらを見た。そして「…兄上が勧めたのであれば…いやしかし…」だとかぶつぶつ呟いている。

まあ。どうやらこのあたりからもう後戻りはできなくなっていたんじゃないかな。

ようこそ！ 生徒会へ☆

うちの学校は他の学校に比べて特殊なのだろう。生徒会はたとえ定数に足りて無くても一人さえいれば普通に実行されるそうだ。その場合はいつでも希望をして、選挙に通れば生徒会に入れるらしい。現在の我が校の生徒会は三人。ちなみに定数は六人。つまり俺は選挙に通れば生徒会に入れる。

選挙をした。それっぽいことをそれっぽく語ってみればけっこうウケるのだ。応援演説者はクラスの適当な奴にたのんだ。まあこんなの皆適当にするのだ。俺は当選した。

「当選おめでとう」

放課後中田先生が俺のところに来てそう言った。ぶっちゃけ当選したくなかった。まあ、そんなこと言っても仕方ないか。

「ありがとうございます」

そう返事を返す。愛想笑いで。

どうやら先生はそのことに気づいてたようだが何も言わなかった。俺はこの先生のことは別に嫌いではない。まあ、好きでもないが。ただ、こういうところはありがたいと思う。

「妹のことをよろしく頼むよ」

：なんかその言葉はどう考えても結婚するときに使いますよね？

「あと、生徒会に入ったら戸惑うかもしれない。けど君なら大丈夫だろう」

「あの。もしかして皆副会長みたいな奴なんですか？」

それだったら戸惑うどころじゃないだろう。下手すれば命の危機だ。

「…まあみたいと言えばみたいかもしれないけどな。ただ、君が思っているのとは違うと思うよ」

「はあ…」

ならば一体どういうことなのだろう。

先生はただ笑うだけだった。

「そうだ。生徒会室を教えないとな」

そう言う先生は生徒会までの道を案内してくれた。

「あれ？もしかして当選した子ですかー」

先生が案内してくれた部屋の前にちょうど今からそこに入ろうかという少女が一人居た。

たしかこの人が会長だったと思う。それにしてもなんという偶然なのだろう。

「やあやあ。エスパーちゃんじゃないか」

そういえば会長ってエスパーって言われてたよな…。どういこうとだ？

俺の中の超能力者エスパーのイメージ

・瞬間移動テレポート

・透視

・なんか物動かす

・スプーン曲げ

・波動？

くらいだな。

「あの…エスパーって…」

どういことですかと聞こうと思ったのだが生憎聞くことはできなかった。

なぜなら副会長が現れていきなり会長へとび蹴りを入れようとしたからだ。

大きく跳びあがった副会長に気づいた会長は後ろへと下がる。

副会長は会長が先程までいたとこに勢いよく着地すると会長をに

らんだ。

「貴様あ！正々堂々と勝負をせんか！」

とりあえず不意打ちっていうのは卑怯だと思う。

「あらー。正々堂々っていうのは個人によって価値観が違うと思うんですよー」

「うるさい！私の正々堂々に従え！」

とりあえず二人とも言っていることが屁理屈にしか聞こえないのは何故だろう。

「だめですよー。そんなこといったら私と貴女の体力、力、すばやさとかが違うのでそれは正々堂々じゃないですよー」

うん。屁理屈だ。あと、この人RPGが好きだな。

それを聞いた副会長は悩ましげに眉間にしわを寄せている。前々から思ってたのだからこいつって結構馬鹿なのでは。

「はいはい。エスパーちゃんも妹も落ち着けー」

すっかり空気と化してた中田先生が2人の間に入る。

「…兄上はどっちが正しいと思う？」

先生は少し困ったかのように笑って副会長に言った。

「いや、多分どっちも駄目でしょ」

うわ、言っちゃった。

「やっぱりですかー」

「やっぱりか」

あれ…。気づいてた？

「そうそう、実は生徒会にはあと一人いるんですよー。多分中に居ます」

そういつて会長は生徒会室のドアを開けた。

中には一人の少年がいた。メガネをかけていて、本を読んでいる優等生の見本みたいな奴だった。

「…あ、当選者」

なんかその言い方はやめてほしいな。

「そうですー。当選者さんですー」

「うむ。当選者だ」

あれ、なんで皆そういつてるんだ。

「いや、俺には…」

「名前を名乗るのは止めた方がいい」

メガネ君が急にそんなことを言った。

「何でだ」

「名前というのは呪いに使えるからね。呪われるのがいやなら名前を名乗るのはやめたほうがいいよ」

それはいくらなんでも杞憂ってもんだろう。まあ、石橋を叩いて渡るとかいう言葉もあるがな。

「だから僕も君に名前を名乗らない。呪われたら嫌だしね。僕のこととはメガネ君でも読書家君でもいいよ」

…呪わねーよ。あと自分でよくそのあだ名をいえるな。

とりあえず生徒会には変人が多いんだな。よく分かった。

歓迎会らしき何か

俺はとんでもないところに来てしまったのではないのだろうか…。後悔しても、もう遅い。あきらめるしかないのだろう。

「そうですねー。当選者さんの歓迎会を始めますかー？」

歓迎会…？ 何も起きなければいいのだが…。

「うむ。なかなかエスパーにしては良い考えだと思うぞ。…よしメガネ！ お前購買でなんか買ってきて来い！」

何でそんなに偉そうなんだ。あとメガネ君をパシるな。

ちなみに家の学校の購買のパンはそこそこ美味しい。しかも種類が豊富なのでけっこう生徒から人気があるのだ。

「…分かった。うぐいすパンとあんパンを買ってくる」

「だー！ なんだそのチョイスは！ メロンパンだろう！」

副会長は手をぶんぶん振りながら怒っていた。

「んじゃー私はクロワッサンですかねー？」

「俺は焼きそばパンでー」

いつのまにか会長と先生もメガネ君をパシろうとしていた。

メガネ君はパシられてることはまったく気にしていない様子で本を閉じて机の上におく。

「…君は？」

俺の方をむいてそう尋ねてきた。何の種類のパンがいいかということだろう。

「…カレーパン」

「邪道！ カレーにはご飯だろう。阿呆！」

会長はこつちを指差しながら大笑いしていた。

…苛付く。

「メロンパンだって邪道だろ！ あとカレーはもともとナンと食う！」

俺は人を見下しはしても人に対して怒ったことはそうなかった。しかし、カレーパンの悪口を言われたのだからほっとくわけにはいかないだろう。

「なっ。当選者ごときが私に口答えするなんて生意気だぞ！ あとカレーにはご飯が最高じゃないって奴は日本人じゃない！」

それは……。確かにカレーにはご飯が最高だとは思うが……。

「ただいま」

メガネ君の声がした。おどろいてそちらの方を振り向くと手には白い袋が……。

「お、サンキュー」

先生がそういつてメガネ君のほうへ手を伸ばす。白い袋を受け取ったら生徒会室の真ん中にある机の上に置いてパンをとりだした。

「えーと、メロンパンが妹で……あれ、エスパーちゃんかな……？」

「兄上……。私の好みぐらい覚えろ……」

まあそんなことをいいつつ先生はパンを分けていった。

「そういえば先生って何で普通にここに居るんですか？」

さつきから気にはなっていたのだ。

「いや、俺生徒会の担当だし」

まあ、特に面白みもない普通の答えだ。

「あと、オカ研の担当だしね」

うん、おかしい。

「……ありや、説明してませんでしたねー」

説明……何のだ？

「実はー生徒会とオカ研は同じなんですよー。もともとオカ研なんぞで部活……まあ同好会ですねー……は去年まで無かったんですよー」

「そこで、僕たちがたまたま生徒会に入ってそれでオカ研をつくらうってことになったんだよ」

「ちなみに貴様もオカ研に入れよ。これは命令だ」

オカ研って何だよ……。そもそもオカルトってなんだよ。というか
エスパーとかも意味わかんないし……。

ただ会長は笑うだけであつた。そしてこう言う。

「ようこそ！ 生徒会へ。そしてオカルト研究会へ。あなたにはまだ
全てを話してませんがいつか教えます。その時まで待っててください。
……。あなたが信用できる人であることを祈ります」

先程までの会長とは別人のような口調であつた。

それと、全てを話していないとはいったい何についてなのだろう
と考えた。

敵登場

今までのあらすじ

俺が内申点目当てで生徒会に入る

生徒会は変人ばかり

実はオカ研もやってます

三行で終わるとは…

俺が生徒会に入ってからしばらくしてのことだ

気にせず手紙を読み進める。

この女を本当に誰か何とかしてくれないものだろうか…。

どうやら読み終えたらしい副会長は心底つまらないとでも言いたいような顔をして手

の生徒会がもしも来たら自分はどう考えてもそいつらに責められるからじゃないのか？

思わず汗がでた。

もしもだ。もしも眼鏡君も会長も来ずに

そういつて俺は少女マンガのように会長を俗に言うお姫様抱っこ
というポーズで持ち上げた。

「ひょえっ!? 当選者さん？」

会長は顔に驚きの表情を浮かべている。

そんなことよりこの人軽いな。

などと思いつつ走る。

我が校生徒会の熱い戦い

俺と会長を五人の男女が囲む。

五人のうち肩までの黒いつやつとしたすごく美しい方が一步前に

「会長がいうならしかたないなあ」

「もー会長冗談だっつーの」

「ごめなさ

前と全く同じ言葉。

工夫が感じられない。よって五点。

「メガネも連れてきてやったぞ」

K校のK子さんはK（今日）もK（気）をつかってます

メガネ君はボブっ子と仲良くしてた。

「君はただの性悪狐だね」

「狐ちゃんはとっても可愛いからいいですよー。そういうあなたはただの本食い虫じゃないですかー」

「僕にとって本は食べるものじゃなくて読むものだよ」

「食べてみたらどうですー？ 知らない世界にいけるかもですよ」

この二人は放っておこうと思う。

さて、一番心配な会長だが。

誘拐されかけていた——のではなく——普通にお茶を飲んでいた。

会長と目が合う。とーせんしゃさーん、と手を振ってきたので振り返す。

「会長よく無事ですな」

「はい！ につっきあの女は私を恐れて逃げたのですよ！」

嘘は良くないと思う。

「えっと…その、ごめんなさい。私怖い話大好きなんで…」

メガネ君戦法を丸パクリしたわけか。

「たまたま今日鞆の中に『傑作！』 ホラー集」と『本当は怖い昔話』『これを読んだら眠れない！ 怖い話』が入ってたんで…」

それはおそらくたまたまではない気がする。

というか、前に男子が会長って怖いとかいってたけどこういう意味か。

「あ、あんまりあの子を苛めないであげてね」

K子さんは半泣きで言う。

「あの子、怖い話をしたらしばらく怖い…」

そのことを思い出したのかぶるぶると震えだした。

「まるで…何かに取り憑かれたように…奇声を発したり…」

それは精神科に行ったほうがいいんじゃないでしょうか。

てーたいむ(前書き)

急展開すぎる気もしますが。

ていーたいむ

あらすじ

生徒会役員兼オカ研会員の俺はある日生徒会室兼オカ研究室で変な手紙を見つける。その手紙の内容はK校の生徒会役員どもがこの生徒会の調査に来るというものであった。やってきたK校生徒会メンバーはどれも変なやつばかり。で、副会長とかメガネとかが大はしやぎ。

そして現在、俺はダブル会長に囲まれてお茶を飲んでいた。

「当選者さん！ このお茶ほうじ茶ですね。渋いです」

「ほうじ茶は温かい方が好きだなー。冷たいのだったら麦茶かな」

「母さんの趣味なんだよ。俺としては緑茶がいいんだけどな」

ダブル会長はどちらも大人しい人でよかった。そのおかげで今こうしてお茶トークができているのだから。

「おい、お前ら何のんきにお茶してんだよ！？」

「菓子はあるか！？」

青春野郎と副会長に気づかれた。お茶トークはそろそろ終了か…。

「畜生！ 俺も混ぜやがれ！」

「エスパー！ 菓子はあるのか！？」

青春野郎と副会長が駆け寄ってきた。

「えーい」

会長が笑顔でさういう。

とたんに青春野郎と副会長の動きが止まる。

いや、ちがうこちらに来ようとはしているのだ。
でも来れない。

まるで見えない壁でもあるのかというように…。

「あ」

会長がこちらを見て苦笑いをする。

「副会長さんには悪いですけど邪魔されなくなかったから思わずやっちゃんいました」

「えーと…何を？」

K子さんは驚いた表情で俺のほうを見る。会長に対しての驚きではなく俺への驚きらしい。

「え…知らないの？ この人」

何をだよ！？ さっぱり状況が理解できない。そういえば会長はエスパールとか何とか言われてたよな…。

混乱中。

哀れ

ようやく落ち着いてきた。

会長は本当にエスパーだったわけだ。…ドッキリだよな。

「ドッキリじゃないですよー」

俺の考えを読んだのか、会長はそういった。これもエスパーの能力か？

「当選者さんの考えなんてお見通しですよ？ 能力じゃないです」
「またも読まれた。」

「おい！ エスパーまだ黙っているのではなかったのか！？ つーかこれさっさとしまえ！」

そういつてバリアーを蹴りまくっている。

「だってお茶の邪魔されたくないかったんです」

「そういう問題じゃねえだろ！？」

青春が叫ぶ。

なんだかだんだん可哀想になってきた。

メガネとボブはまだこちらの状況に気づいておらず、嫌味の言い合いが続いている。

K子さんは俺のほうをじっと見ている。

どうしろってんだ。

「あの。会長、説明してもらえませんか？」

会長がこちらをみる。

「てへ☆ 簡単に説明しますとー。バリアー張っちゃいました。てへ☆」

☆マークに少しイラついたが、結構とんでもないこと言っている。

「バリアーって何ですか」

「障壁のことですよ。って障壁のほうが難しい言い方ですね。えーと…見えない壁です」

「そういうことじゃなくってどうしてバリアーなんて張れるんです

か!？」

「簡単ですよ」

そういつて胸を張る。

「私はエスパーガールだからです」

そういう問題なのか。

「おいエスパーなんとかしろ!!」

副会長はバリアーを蹴りまくる。バリアーはまったく見えないのでここから見ると副会長は何がしたいのかわからない。

スルーで。

「バリアーって何でできてるんですか？」

「何でできてるのかな…。イメージ的にはものすごく硬い空気かな?」

どうやら謎なようだ。

「ねえ。なんでこの新人君は何も知らないの? 仲間じゃないの?」

K子さんが口を挟む。

「中田先生の推薦なんです」

「じゃあ仲間?」

「まだ分かりません」

何の話だ? 仲間? もしかして超能力者の?

分からないことが多すぎて頭がこんがらがってきた。ようやく落ち着いてきたのに。

「おい!! エスパー!! 怒ったぞ!!」

そう叫ぶと副会長はバリアーから少しはなれて走り出した。

勢いをつけてバリアーを破るつもりなのだろう。

結果、足をバリアーに思い切りぶつけて悶える副会長の姿があった。

青春はそれを指差して大爆笑中。

会長はそれを気に留めず俺とK子さんにお茶を渡してきた。

「それではお茶でも飲みましょう」

俺とK子さんはだまって頷いた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2374i/>

オカ研の怠惰で愉快的日常

2010年10月8日13時40分発行